
路上の画家と車椅子の少女

あいあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

路上の画家と車椅子の少女

【Nコード】

N0356L

【作者名】

あいあ

【あらすじ】

画家の夢見る少年、夢を描くためホームレスの道を選ぶ。
その少年に恋する少女、彼のない世界は生きる意味がない。
二人の生きる道には、何かあるのだろうか…

男1話

「大！いい加減勉強したらどうなんだ！？」
また、いつもの怒鳴り声。
耳には入らない怒鳴り声。

俺の名前は山村 大助
どこにでもいる勉強嫌いの高校二年生。
でも、ちよつと違う。いや、自分ではただ目指してるだけのものだ。
画家を目指している。

中学生のころ、美術の薄っぺらい本に居たピカソ。
彼の絵は、俺の心を動かした。
それからだろう。俺が絵画にはまったのも…
ただ絵画を見るより、自分で描きたい、自分にしか描けないものがあると思った。
売れなくてもいい。一部の人に気持ち伝わればいい。
だから画家になりたかった。

しかしなれない。
両親の存在。
夢への道をさえぎる邪魔者。まるで悪魔だ。

「……」
眠っていたようだ。
いつもなら絵を描き始めると、眠ることなど一度たりともなかった。
「疲れてるのか…」
身支度をする。

今日は月曜。

憂鬱な気分になる。

「大！急ぎなさい！遅刻するわよ！！！」

悪魔はさらに追い討ちをかける。

急がなければならぬことぐらい分かってる。

食パンをくわえて重い玄関の扉を開ける。

隙間から日が差し込む。

白いキャンバスがひとつ。

この太陽を描こう。

女1話

「休みももう終わるな」

夕闇から夜という闇になる時刻。

明日は学校。

私の名前は桜田 愛理

「あいちゃん」と言われてる。

学校が好きな高校二年生。

好きといつても教科とかじゃない。

人。好きな人に出会えるから。

山村 大助。大ちゃん。

幼稚園のころからの幼馴染。

私は大ちゃんのことを好きだ。

しかも家が隣同士で学校に行く時、大ちゃんが迎えに来てくれる。

それも楽しみの一つ。

大ちゃんの部屋に明かりがついている。

きつと絵を描いているんだろう…

中学のころ私を描いてくれた。

五角形の輪郭。間隔が離れた目。

「キュビズムっていうが風なんだ。分からんか？」

さっぱり分からなかった。

けど、人前では絵を描かない大ちゃんが描いてくれた。

その絵は私の部屋に飾ってある。

相変わらずよく分からない…

でも、これが私だということがわかるだけ。

それだけで良かった。

「あつ。明日美術だ。」

小さく独り言。

かばんの中は、金曜日の授業の教科書やノート。

月曜日の準備に差し替え、かばんのチャックを閉める。

そろそろ眠くなってきた。

大きな熊のぬいぐるみ。

ダブルベッド。

いずれこのぬいぐるみが大ちゃんになれば最高の幸せ。

ベッドに潜り、ニヤニヤしながら神様をお願い。

いいことありますように。

男2話

鉄錆びた車庫から自転車を取り出す。

車庫の中は、スプレー塗料の落書き。

多分記憶にないくらい小さかった俺が描いた太陽。

このときは、両親も褒めてくれた。

「将来は画家になるんじゃないか」と…

しかしいつから勉強しろとうるさく言うようになったのだろう…

なぜ画家の道も反対するのだろう…

理解できなかった。

慣れた感じで、サドルにまたがりペダルをこぐ。

すぐに止まる。

隣のやつを呼ばないといけない。

チャイムを押し、いつもの高い声が聞こえる。

「は〜い今行くよ〜」

俺が配達員だったら、どうなるんだろうか。

ぐしゃぐしゃの髪の毛。

漫画のような感じでパンをくわえて出てきた。

朝からテンションの高さが異常だ。

愛理も自転車に乗り、二人並んで学校目指す。

・・・

いつもなら、愛理から無駄な会話が始まるはず。

自分から会話はしないけど、聞いてみるか…

「なんかあった?」

「ふえっ?」

「いや今日しゃべってねえし…」

「うん・・・まあいろいろあっただけww」

「ふうん・・・」

会話が途切れた...

それから何一つしゃべることなく、学校に着いた。

「あつ・・・」

愛理が何か思い出したようにつぶやいた。

「かばん忘れた...」

・・・なぜ俺も気づかなかつたのだろう。

「ごめん...先に教室入ってww」

そう言い残し愛理はものすごいスピードでサドルにまたがり、ペダルをこぎ曲がり角を曲がり消えた。

そして、俺はのんびりと校門を通り過ぎた。

女2話

ピンポン

「はい今行くよ」

この時間帯は多分大ちゃん。

鏡を見る。寝癖がすごい。

もう少し早く起きれば簡単に準備できるけど、布団の中から抜け出せない。

「まあ、いつか。」

すぐに制服に着替えて、焼く前の食パンをくわえて玄関のドアを開けた。

私の顔を見て引いている。確かにいつも以上に寝癖がすごかったかも。

「ちよつと目覚ましが鳴らなくてww」

「いつものことだろ。」

遅れたことを軽く謝って自転車にまたがる。

おもいつきりペダルをこぐ。

大ちゃんは、部には入っていない。

だけど、クラス一の俊足である。頭も良い。

別の学年や、隣のクラスから告白とかラブレターが来たらしい。

私はこっそりと告白現場を見に行ったりしてた。

耳を澄まして聞いていて、

「ごめん…」と大ちゃんが言ったとき心の中でガッツポーズをした。だけど、その後「好きな人いるから…」

それが気になって眠れない日もあった。

「なんかあった？」

「ふえっ？」

「いや今日しゃべってねえし…」

「うん・・・まあいろいろあっただけww」

「ふうん・・・」

珍しく大ちゃんから話しかけてきた。

けど、すぐに終わっちゃった・・・

学校に着いた。

肩がいつもより軽いような気がする。

かばん・・・ない。

大ちゃんが呆れた顔をしている。そりゃそつだろつ…

すぐに自転車に乗り、かばんを取りに行く。

遅刻したのは言うまでもない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0356/>

路上の画家と車椅子の少女

2010年10月12日08時00分発行